

日本語の埋め込み節は、その一部を残して省略できることが観察されている。Ross (1969) によって間接疑問文縮約 (Sluicing) として英語で報告されて以降、日本語においても似た構造が井上 (1978) によって報告された。しかし、日英語における当該現象には異なる振る舞いがいくつか観察されており、両言語において同様の現象として扱えるかが問題となってきた。本発表では、これまで数多くなされてきた先行研究からの帰結として、「のだ文 (In-situ focus)」から派生されていることを概観した後、繫辞「だ」の補部を省略することで派生されるという二重節分析 (繫辞残留削除分析) を提案する。具体的には、まず、繫辞が焦点句主要部であるか、動詞句主要部であるかというこれまでの議論に対し、繫辞の詳細な分析と新たな例文の報告を行うことによって、節省略時に派生する繫辞は動詞句内要素であると結論付ける。次に、間接疑問文縮約を含む、日本語の焦点構造 (のだ文、分裂文; Cleft、はぎ取り文; Stripping、繫辞残留現象; Copula Stranding Ellipsis) に見られる類似点を報告し、繫辞残留削除分析の提案を行う。

1. はじめに

日本語では、(1) のように一部を残しての埋め込み節の省略ができると報告されており、本発表では英語の Sluicing と区別するために擬似間接疑問文縮約 (Sluicing-Like Construction; SLC) と呼ぶ。

(1) 太郎は[花子が何かを買ったと]言っていたが、僕は[SLC 何を(だ)か]知らない

これまでの研究により、以下の3通りに大別される分析が提案されてきた。¹

(2) a. WH 移動分析: Takahashi (1994)

僕は[CP 何を₁ [_{IP} 花子が_t-買った]か]知らない

b. 分裂文分析: Hiraiwa and Ishihara (2012)

僕は[_{TopP} [_{FocP} [_{IP} 花子が_t-買った]の]₂-は [_{FocP} 何を₁ ただか]]知らない

c. 焦点移動分析: Hiraiwa and Ishihara (2002), Nakamura (2013)

僕は[_{FocP} 何を₁ [花子が_t-買ったの]だ]か知らない

本発表では、間接疑問文縮約に関して、①上記した先行研究からの帰結により「のだ文」からの派生であることを概観し、②繫辞が動詞句内要素であることを示す新たなデータを提示し、③日本語の焦点構造との類似点を示すことによって、以下の分析を提案する。

(3) 繫辞残留削除分析 (Copula Stranding Ellipsis; CSE)

僕は[何を₁ [_{VP} [_{CP} 花子が_t-買ったの]だ]か]知らない

¹ 非移動削除分析 (Kimura 2010) に代表される日本語の (Genuine) Sluicing に関しては4節で触れるが、SLCに限れば(2b)の分裂文分析に大別される (cf. Abe 2015, Hiraiwa 2021)。

2. 先行研究とその帰結

以下から、先行研究による分析と、それぞれの反例を概観していくことにより、SLC が少なくとも「のだ文」から派生されていることを見ていく。

SLC は当初、英語の Sluicing と似た構造をしていることから、Takahashi (1994) によって日本語においても同様の分析が提案された。

- (4) WH 移動分析 (先行文：太郎は[花子が何かを買ったと]言っていたが、)²
- a. 僕は[花子が何を買ったのか]知らない
 - b. WH 移動 + IP 削除
僕は[_{CP} 何を₁ [_{IP} 花子が~~t₁~~買った]か]知らない
(cf. Hanako bought something, but I don't know [Sluicing what₁ [~~Hanako bought t₁~~]])

WH 移動分析では、間接疑問文における WH 句「何を」が CP-spec へと WH 移動し、「何を」を残してその下の IP を省略することで派生される。しかし、この分析では日本語の SLC に特有の性質である繫辞の任意性と、非 WH 句の残置を捉えることができない (cf. Nishiyama et al. (1996), Fukaya and Hoji (1999))。

- (5) a. 僕は何を(だ)か知らない (任意繫辞)
- b. *僕は[何を₁ [花子が t₁ 買った]だか]知らない
 - c. 僕は新しい車をだと聞いた (非 WH 句残置)
 - d. 僕は[_{CP} 新しい車を₁ [花子が t₁ 買ったのだと]]聞いた

SLC では (5a) のように任意に繫辞が派生可能であり、WH 移動分析では非文法的な (5b) から派生されることになり、その文法性を予測することができない。また、WH 句以外の要素の残置も (5c) のように可能であり、WH 移動では捉えることができない。

そこで、Hiraiwa and Ishihara (2012) は、繫辞を含む「のだ文」を基底とする分裂文から派生されていると提案した。

- (6) 分裂文分析
- a. 僕は[花子が何を買ったのだか]知らない (のだ文)
 - b. 僕は[_{FocP} 何を₁ [_{FinP} [_{IP} 花子が t₁ 買った]の]だか]知らない
 - c. 僕は[_{TopP} [_{FinP} [_{IP} 花子が t₁ 買った]の]₂-は [_{FocP} 何を₁ t₂ だか]]知らない (分裂文)
 - d. 僕は[_{TopP} [_{FinP} [~~IP~~ 花子が~~t₁~~買った]の]₂-は [_{FocP} 何を₁ t₂ だか]]知らない (SLC)

この分析では、「のだ文」に現れる「の」が FinP 主要部、「だ」が FocP 主要部であると仮定し、まず残置句 (何を) が焦点化によって FocP-spec へ、そして残された FinP が主題化により TopP-spec へと移動することで、分裂文が派生される。そして、その主題化された

² 以降、同様の例文を使用する際には、紙幅の都合上 SLC の先行文を明記しない。

FinP を項省略によって削除することで、SLC が派生されると分析している。これにより繫辞の派生や非 WH 句の残置など、日本語特有の性質を捉えられるようになった。

分裂文分析では、「のだ文→分裂文→SLC」の派生が提案されたが、Nakamura (2013) は「のだ文→SLC」のように、「のだ文」から直接 SLC が派生されていると指摘している。Hiraiwa and Ishihara (2012) では、島の現象や、ガノ交替、多焦点など多くのデータを上げてはいるものの、全て分裂文と SLC に共通の容認性を示すデータであった。そこで、Nakamura (2013) は分裂文では非文法的で、SLC では文法的なデータ、つまり、分裂文から SLC が派生されていると考えると捉えられないデータ (7) を提示することで、「のだ文」と焦点化のみで SLC が派生されていると (8) のように提案した。

(7) のだ文→*分裂文→SLC

- a. 健が_{[Small Clause} マリを可愛く]思ったのだ (のだ文)
- b. *健が思ったのはマリを可愛くだ (分裂文)
- c. 健がサキを可愛く思ったらしいが、僕はマリを可愛くだと勘違いしていた (SLC)

(8) 焦点移動分析 (see also Hiraiwa and Ishihara 2002)

- a. 僕は[花子は何を買ったのだか]知らない (のだ文)
- b. 焦点移動 + FinP(IP)-ellipsis
僕は_{[FocP} 何を ₁[花子が~~は~~買ったの]だ]か知らない

Hiraiwa and Ishihara (2012) の分析では、(7) では非文法的な分裂文から文法的な SLC が派生されていると誤った予測をしてしまう。そこで、(8) のように、主題化して分裂文となる以前の、焦点化の段階で省略が起きていると提案した。

以上で概観した先行研究から、全てのデータを捉えるためには、少なくとも SLC は「のだ文」から派生していると考え必要がある。3 節ではその「のだ文」に現れる繫辞「だ」の派生を詳しく分析し、4 節で焦点構造と比較することで、(8) の焦点移動分析では捉えられない、島の現象を含めて説明できる、新たな分析を提案する。

3. 繫辞と時制

2 節で概観した SLC の分析は、任意に派生可能な繫辞「だ」が焦点句主要部であるという仮定に基づいてなされてきた。しかし、この繫辞が焦点句主要部 (Foc⁰) であるか動詞句主要部 (V⁰) であるかという議論自体は未だ続いている。本節では、繫辞が Foc⁰ であることを示す証拠として Hiraiwa and Ishihara (2012) が用いた時制の一致について再分析することで、V⁰ であると結論づける。

まず、(9) が繫辞「だ」が V⁰ であることを示すデータである。

- (9) a. *太郎が来ただろうそうだ b. *太郎が来ましたそうです
- c. *太郎がくるねそうだ d. 太郎が来たのだそうだ

森山 (2020)

伝聞を表す「そうだ」は (9a-c) のように IP を補部にとり CP と関連づけられる要素 (モーダル、丁寧語、終助詞) は埋め込むことが出来ないが、(9d) のように「のだ文」の埋め込みはできる事から、繫辞「だ」は IP 内要素であると考えられる。対して、Hiraiwa and Ishihara (2012) は「のだ文」における繫辞「だ」が (10) のように時の副詞「昨日」との時制の一致を見せない事から、CP 要素、つまり Foc^0 であるとしている。

- (10)a. 昨日太郎は病気{*だ/だった}
b. 昨日太郎が何かを買ったの{だ/だった}

一見すると、通常の繫辞 (10a) と異なり、「のだ文」の繫辞 (10b) は時制の一致を見せないかのように振る舞っている。しかし、モーダルの助動詞「ような」と対応する「どうも」を用いると、時制の一致を起こす場合が観察できる。

- (11) 昨日どうも太郎が本を買うようなの{*だ/だった}

繫辞「だ」が Foc^0 であると考え、常に時制の一致を見せることはないはずなので、この差は問題となる。そこで、 V^0 であると考え、その帰結として二重節構造であることが考えられ、(12) のように主節と埋め込み節のどちらに時の副詞が生起できるかの差で捉えることができる。

- (12)a. [_{matrix} [IP/embedded 昨日太郎が何かを買ったの]{だ/だった}]
b. [_{matrix} 昨日[CP/embedded どうも太郎が本を買うようなの]{*だ/だった}]

時制の一致を見せない場合であれば、(12a) のように「昨日」が主節でも埋め込み節でもどちらでも生起できる為、主節の繫辞との時制の一致は任意である。時制の一致を見せる (12b) では、CP 要素と関連づけられる「ような」と対応する「どうも」が CP を形成し、「昨日」は主節にのみ生起可能であることから時制の一致が義務的となっている。

焦点移動分析では、分裂文分析と同様に、繫辞が Foc^0 であるという前提に立っていた為、繫辞が V^0 であるとする焦点化では繫辞の任意性がまた捉えられなくなってしまう。そこで、次節では、繫辞が V^0 であることを踏まえた新たな分析を提案する。

4. 繫辞残留削除 (項省略) 分析

日本語では、(13) のように繫辞を残してその埋め込み節を省略することができ、これを繫辞残留現象 (Copula Stranding Ellipsis; CSE) と呼ぶ (中野 2021a)。

- (13)A: 太郎が宿題を忘れたんだって B: []だと思ったよ

この埋め込み節は (14) のように、「のだ文」に省略がかかることで派生されていると観察

されている。本発表では、「のだ文」を基底として、繫辞「だ」の補部が省略されている CSE から抜き出しが起きたものが SLC であると主張する。

(14)[VP [CP 太郎が宿題を忘れたの]だ]と思ったよ

(15) 繫辞残留削除分析

- a. 僕は[花子が何を買ったの]だか]知らない
- b. 僕は[何を₁[VP [CP 花子が~~が~~買ったの]だ]か]知らない

残置句「何を」が二重節の埋め込み節から、繫辞と同じ節まで上がり、動詞句主要部である、つまり動詞である「だ」の文補部が項省略によって省略される。

以下から、「のだ文」の性質である埋め込み節内での主節現象が、この SLC と CSE を含む日本語の焦点構造でも観察されることを示し、当該分析ではそれらが全て「のだ文」から派生されるとする説明が可能であることを見る。さらに、焦点移動分析で問題となる、日本語の SLC 特有の島の現象に関しても、繫辞残留削除分析であれば適切に説明できることを見る。

Hooper and Thompson (1973) による動詞のタイプ分けによって、埋め込み節でも主節現象が生じる場合が観察されたことで (Type A, B, E (say, suppose, realize...) = embedded root transformation 可能)、日本語においても Miyagawa (2012) によって同様のタイプ分けが機能することが (16) のように報告されている。そして、(17) のように「のだ文」においても主節現象と同様の分布が報告されている (Yasui 2020, P.C.)。

(16) 主節現象：敬語表現

- a. 太郎は花子が{来た/*来ました}ことを否定した (タイプ C)
- b. 太郎は花子が{来た/来ました}と言った (タイプ A)
- c. 太郎が来ますから、早く帰りましょう (理由節; reason clause)
- d. *太郎が来ます{前に/後に/時に}、風呂に入っていた (時節; temporal clause)

(17) のだ文

- a. *太郎は花子が来たのだことを否定した (タイプ C)
- b. 太郎は花子が来たのだと言った (タイプ A)
- c. 太郎が来るのだから、早く帰りましょう (理由節; reason clause)
- d. *太郎がくるのだ{前に/後に/時に}、風呂に入っていた (時節; temporal clause)

同様の分布が、日本語の焦点構造においても観察される事から (中野 2021b)、「のだ文」に統語操作がかかることによって、様々な焦点構造が派生されていると考えられる。

(18) 先行文：太郎は[花子がリンゴを食べた]ことを否定した

- a. *次郎は[In-situ focus 花子がリンゴを食べたのだ]ことを否定しなかった
- b. *次郎は[SLC/Stripping リンゴを(だ)]ことを否定しなかった

- c. *次郎は[CSE (だ)ことを]否定しなかった
- d. *次郎は[Cleft 花子が食べたのはリンゴを(だ)]ことを否定しなかった

(19) 先行文：先生が家に来るんだよね？

- a. [In-situ focus 先生が家に来るのだ]から、今急いでいるんです
- b. [SLC/Stripping 家にだ]から、今急いでいるんです
- c. [CSE だ]から、今急いでいるんです
- d. [Cleft 先生が来るのは私の家にだ]から、今急いでいるんです

次に、焦点移動分析で問題となる島の現象を見る。英語の Sluicing であれば、省略が島の現象による非文法性を修復することが報告されているが、日本語の SLC ではその特質として修復されないことが報告されている。

- (20)a. They want to hire someone who speaks a Balkan language, but Merchant (2001)
 I don't remember which (*they want to hire someone who speaks t_1)
- b. 直也は弟に何かを送ってきた人を招待したらしいが、 Hiraiwa and Ishihara (2012)
 *僕は何を(直也は弟に送ってきた人を招待したの)だか知らない

焦点移動分析では、CP での素性一致により、英語と同様の素性一致による節省略が生じていると考えるため、島の現象が修復することを誤って予測してしまう。しかし、繫辞残留削除分析であれば、二重節構造をとり、island からの spec への抜き出しによって削除が起因するわけではないため、bad-trace が完全には削除されず、非文法性を正しく予測できる。

(21) 僕は[CP 何を₁ [XP t_1 [VP [CP 花子が~~-t₁~~買ったの]だ]]か]知らない

また、SLC とは異なる現象として、英語のように島の現象に違反しないタイプである日本語の (Genuine) Sluicing (Hasegawa 2008, Takita 2011, Abe 2015)において繫辞が派生できない事を、Sluicing では英語タイプの分析、SLC では繫辞に起因される項省略分析という対比で説明できる (e.g. matrix sluicing, partially truncated sluicing, contrast type sluicing, sluicing with control predicate)。 (22a) のように繫辞「だ」が派生できない環境では、英語同様に WH 句以外の残置は許されず (22b)、島の現象も修復する (22c)。

(22) Genuine Sluicing in Japanese

- a. 太郎はどこへ行こう(*だ)か {Control Predicate 迷っている/決めかねている}
- b. 太郎は LI に論文を出そうと決めたが、
 花子は{*NLLT にかどうか迷っている / *NLLT にと決めた}
- c. Island Repair
 太郎はまず[Island 自分の部屋から何を盗んだ男を]調べようか決めたが、
 花子は[何をか]決めかねている

5. おわりに

本発表では、日本語の SLC に関する先行研究を概観することで、「のだ文」からの派生であることを概観し、繫辞の詳しい分析と焦点構造における主節現象の観察により、幅広いデータを捉えることのできる、二重節構造における項削除分析を提案した。本研究では繫辞の「だ」が動詞句主要部であると仮定して分析したが、データとしては IP 内に存在していることを示していたため、繫辞「だ」が機能範疇である vP 主要部であるとも考えることができる。すると、島の現象が観察される SLC は動詞句削除 (V stranding VP Ellipsis; VVPE) であると分析でき、英語の Sluicing と VP-Ellipsis の関係に対応させて、日本語の Genuine Sluicing と SLC を捉えられることになる。今後の展望として、この項削除分析が動詞句削除によって派生されている可能性 (Argument Ellipsis vs Verb Stranding VP Ellipsis)、そして Genuine Sluicing がどのように派生されているのか (Movement vs In-situ) についても見ていく必要がある。

参考文献

- Abe, Jun. 2015. *The In-situ Approach to Sluicing*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. / Fukaya, Teruhiko and Hajime Hoji. 1999. Stripping and sluicing in Japanese and some implications. In Sonya Bird, Andrew Carnie, Jason D. Haugen & Peter Norquest (eds.), *The proceedings of WCCFL 18*, 145–158. Somerville, MA: Cascadilla Press. / Hasegawa, Nobuko. 2008. Wh-movement in Japanese: Matrix sluicing is different from embedded sluicing. *The proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics 4*. 63-74. / Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2002. Missing links: Cleft, sluicing, and “no da” construction in Japanese. In Tania Ionin, Heejeong Ko and Andrew Nevins eds., *Proceedings of the 2nd HUMIT Student Conference in Language Research (MIT Working Papers in Linguistics 43)*. 35-54. MITWPL, Cambridge. / Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and In-situ Focus in Japanese. *Syntax* 15.2. 142-180. / Hiraiwa, Ken. 2021. Sluicing cannot apply in-situ in Japanese. *Proceedings of the linguistic Society of America* 6 (1). 317-324 / Hooper, Joan B. and Thompson, Sandra A. 1973. On the applicability of root transformations. *Linguistic Inquiry* 4. 465-97. / 井上和子 (1978) 『日英対照日本語の文法規則』大修館書店. / Kimura, Hiroko. 2010. A wh-in-situ strategy for sluicing. *English Linguistics* 27. 43–59. / Merchant, Jason. 2001. *The syntax of silence: Sluicing, islands, and the theory of ellipsis*. Oxford University Press, New York. / Miyagawa, Shigeru. 2012. Agreements that occur mainly in the main clause. In Aelbrecht, Lobke et al., eds. *Main clause phenomena: New Horizons*. John Benjamins. 79-112. / 森山俊成 (2020) In-situ focus 文の構造. 日本英語学会第 38 回大会 Conference Handbook. 22-5. / Nakamura, Masanori. 2013. On clausal ellipsis in Japanese. *The jimbunkagaku-nenpo* 43. 141-170. / 中野晃希 (2021a) 繫辞残留現象. 第 162 回日本語学会. / 中野晃希 (2021b) 主節現象と埋め込み節の In-situ focus 文. 第 59 回言語文化学会 (言語社会学会共催). / Nishiyama, Kunio, John Whitman & Eun-Young Yi. 1996. Syntactic movement of overt *Wh-* phrases in Japanese and Korean. In *Japanese/Korean linguistics 5*, 337–351. Stanford, CA: CSLI. / Ross, John R. 1969. Guess who? In Robert Binnick, Alice Davidson, Georgia Green, and Jerry Morgan eds., *Papers from the 5th regional meeting of the Chicago Linguistic Society*. 252-286. / Takahashi, Daiko. 1994. Sluicing in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 3. 265-300. / Takita, Kensuke. 2011. ‘Genuine’ sluicing in Japanese. *Proceedings from the Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society* 45 (1). 577-592. / Yasui, Miyoko. 2020. How to licence embedded instances of *no-da* and the politeness marker *mas* in Japanese: CP recursion or Speech Act Phrase. Paper presented at *West Coast Conference on Formal Linguistics 38*. The University of British Columbia.